「ザカリアの預言」（ルカによる福音書一章五七～八〇節）

1　時間の主

クリスマスを終えて、新たな教会の一年が始まったところです。イエスによって開かれた、そして与えられた信仰の道を大切にし、共に歩み通したいものです。さし当たってのゴールは、来年のクリスマスです。

今日はまた二〇二〇年最後の日曜日です。来週顔を合わせるときには二〇二一年になっています。時が進んで行きます。現在は過去となり、時間の流れは一方的、戻ってきません。

この流れる時間のことを聖書は、クロノスという言葉で呼んでいます。じつは今日の箇所にも出てきます。「さて、月が満ちて」の「月」と訳されている言葉がクロノスです。私どもがふつう時間というときの、その時間のことです。時間が長く感じられる、短く感じられる、と言うことがありますが、そうした主観的な時間ではありません。みんなに共通した、測ることのできる時間、クロノス、その中に私どもは生きています。

時間を表すこのクロノスという言葉、ご存じの方も多いと思いますが、ギリシャ神話の神の一人でもあります。時間の神、それがクロノスです。彼は父親から王権を簒奪するのですが、自分も自分の子供から王位を奪われることを恐れて、生まれた子を次々に飲み込んでいくのです。一番の下の子、名前はゼウス、彼だけが母の策略で命拾いし、彼が次の王になることになります。

このクロノスの逸話を聞くたびに私が思い出すのは、有名な鴨長明の『方丈記』（一二一二年）の冒頭の言葉です。「行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとどまることなし」。良いことも悪いことも、すべて泡のごとく飲み込まれていく。その川のようなもの、それが時間というものです。すべては、まるで何事もなかったかのように過ぎ去っていく。これが私ども日本人が人生に対していだいている無常観です。虚無感と言ってもよいかも知れません。

しかし聖書にはクロノスと対照的な、もう一つの時間を表す言葉があります。それがカイロスという言葉です。有名な旧約の聖句を一つ引きます。

> 神のなさることは、みなその時にかなって美しい（コヘレトの言葉三・一一、口語訳）。

この「時にかなって」というのがカイロスです。カイロスという言葉は、ちょうどいい時を表します。

そうすると聖書の認識はこうなります。なるほど私ども人間はみな、すべてが「うたかた」のように消え去っていく、すべてをやがて押し流していく時間の中に生きています。

しかし、このうたかたのようにすべてを飲み込んでゆく時間の中で、神は働いてく

ださるというのです。その働きは私どもが願っている通りに、ということもあるでしょうし、そうではなく、私どもの期待や予想に反してということもあるでしょう。確かに神は働かれるのです。そのとき時間は、すべてを飲み込んでいくだけのものではないのです。時間はそこに神が力強く介入し、それを上から断ち切り、人を救い、裁き、私どもの味方となって私どもを親しく導いてくださる場でもあるのです。そしてその神の働きは、その時にかなって見事だ、美しいとコヘレトは言うのです。

考えてみるまでもなくこの流れ去っていく時間をつくられたのは神です。天地創造はまた時間の創造です。「わたしの時はあなたのみ手にあります」（詩三一・一五、口語訳）。そうであれば、私どもは、この流れ去る時間の只中にあって、虚無的になったり悲観的になったり、感傷的になったりすべきではありません。神はまたこの時間の主でもあるのだからです。

何ごとについても私どもは神の時（カイロス）を待ちたいと思います。できるだけすべてを整えて待ちたいと思います。人間の時間（クロノス）の中で、神を信じ、神に従い、そして神の働きを待ちたいのです。いまはコロナの収束を祈りたいし、それで傷ついた人々の癒やしを祈り、またすべての人の尊厳が守られるように祈りたいのです。神がよしとたもう時にみ業をなし、救いへと導いてくださることを待ちたいのです。さし当たりのゴールである毎年のクリスマスを何度も重ねながら、やがて万物が新しくされることを、そして神が自ら人と共にいて、その神となり、人の目の涙をことごとく拭い取ってくださることを、その神の国の来ることを待ち望み（黙示録二一章）たいのです。

2　この子の名はヨハネ

さて改めて今日の聖書箇所に目をとめたいと思います。ルカによる福音書第一章の終わりです。アドベントからクリスマス、そして今日まで、今年はこの第一章をずっと読んできました。今日がその最後です。

第一章はルカが、イエスのことを「順序正しく」（一・三）書くために、生まれる前にさかのぼって書いているところです。ですからイエス誕生のことはまだで、マリアの受胎告知までです。それを真ん中にして、その前と後に、洗礼者ヨハネのことが書いてあります。

前と後、その前のほうは、ヨハネ誕生の予告、具体的には母エリサベトがヨハネを身ごもるところまでです。後のほう、今日の箇所ですが、約束されたようにヨハネが生まれたことと父ザカリアの預言が記されています。預言といっても聖書では未来の出来事を当てるということではなくて、神の言葉を伝達するということです。内容は神への賛美です。

さて前のほうで、私どもに印象深かったのは、父ザカリアが口が利けなくなったことでした。聖所で務めをしていたとき彼は妻エリサベトが男の子を産むとのお告げを受けます。しかしそれを疑ったため、不信仰のゆえに、天使によって、口が利けなくされたのです。

そのあとこれはどうなったのでしょうか。今日の箇所に結果が書いてあります。舌がほどけ、口が利けるようになった、話せるようになったと。口が利けないのは約束

が成就するまで、つまりヨハネ誕生までとも言われていました（一・二〇）。告げられていた通り、子供が生まれたので、ザカリアは話せるようになります。そこを最初に確認しておくことにします。

八日目に、その子に割礼を施すために来た人々は、父の名を取ってザカリアと名付けようとした。ところが、母は、「いいえ、名はヨハネとしなければなりません」と言った。しかし人々は、「あなたの親類には、そういう名の付いた人はだれもいない」と言い、父親に、「この子に何と名を付けたいか」と手振りで尋ねた。父親は字を書く板を出させて、「この子の名はヨハネ」と書いたので、人々は皆驚いた。すると、たちまちザカリアは口が開き、舌がほどけ、神を賛美し始めた（五九～六四節）。

「その子に割礼を施すために来た人々」とは、ここでの文脈では、「近所の人々や親類」です。割礼はともかく、彼らはさらに名前もつけようとします。「親類」の人もここにいたので、そういうこともあるかなとは思いますが、一般には両親がつけるので、当時もそうであったので、その意図、意味ははっきりしません。

それに対して、最初に母が、名前はヨハネでなければならないと、父の名をつけようとした人たちに強く反対します。もともとヨハネと名付けよとの命令を天使から受けとったのはザカリアでした（一三節）。しかし彼はしゃべれなかったので、妻エリサベトが夫からそれを耳で聞くことはなかったとしても、何らかの仕方で伝えられたことは十分考えられます。

割礼を施すために来た人々は、親類には、そういう名をもつ人はいないとして反対します。そもそも命名のことでは、父ザカリアは無視されていたようです。しかしさすがに父親に尋ねようということになります。「手振りで尋ねた」とあります。ザカリアは口が利けないだけでなく、一時的に耳も聞こえなくなっていたようです。そこでザカリアは書く板をもってこさせて、そこに、この子の名前はヨハネと書いたというのです。

妻エリサベトとザカリア、二人が期せずして、家系にない名前ヨハネを主張したことに、人々は驚いただけではありません。恐れすら感じた。恐れというのは神がそこに在ますという畏怖を感じたということです。それはそのまま、生まれたばかりの子供への大きな関心と期待を、集まっていた人たちだけでなく「ユダヤの山里中」の人に与えることになったのです。

3　憐れみの神

不信仰を許され、舌がほどけ、口を開き、ザカリアは賛美の声を上げます。ザカリアの預言です。

もともとザカリアは妻エリサベトとともに、主の前に正しい人で、掟と定めを守って、まさに「非の打ちどころ」（一・六）のない人でした。後で出てくる、幼子イエスと神殿の入り口で出会った、あの老シメオン、そしてアンナにも通じるような敬虔な人物です。

老シメオンのようにメシアに会うまで決して死なないとのお告げを受けていた人ではないとしても、少なくとも「イスラエルの慰められるのを待ち望」（二・二五）んでいた人です。メシアがイスラエルに与えられること、そしてそれはダビデの家から生まれることなどよく知っていました。我が子ヨハネが、そのメシアに先駆する、メシアの道ぞなえをする者であることもよく分かったと思います。イエスご自身が、後に、洗礼者ヨハネを「現れるはずのエリヤである」（マタイ一一・一四）と紹介したことがあります。メシア到来に先立ってエリヤが現れるということも、ザカリアはよく知っていたと思います。

ザカリアの預言、今日私がはじめに少し申し上げたこととの関連で、全部ではありませんが、取り上げたいと思います。

私が最初に申し上げたことは、私ども人間は、流れゆく時間の中で生活し、その限り様々の制約の中で生きているけれども、そのまさに時間の中で神は御心に従い、時にかなってみ業をなさるということでした。

福音書の中でも、とくにルカによる福音書は、そのことをしっかり意識している聖書です。ルカが、イエス誕生を告げるのに、その歴史的（時間的）背景として、それは「皇帝アウグストゥス」による住民登録の勅令が出たときであったとか、シリア州の総督がキリニウスであったとか書いていることを思い出していただければよいと思います。二〇二〇年から二一年へと私どもがいま進みつつあるこの時間です。この私どもの時間の中で、世界史の中で、私どもの生活の只中で、神はみ業を始められたとルカは言っています。神の救いの業がなされるのはここ以外にはないのです。この私たちの時間をおいてほかにないのです。

そうした観点からザカリアの預言を読むと、私には三つの言葉が大切なものとして浮かび上がってきます。一つは「訪れて」（六八、七八節）という言葉、もう一つはくり返し出てくる「憐れみ」（七二節、他）という言葉、もう一つは「契約を覚えていてくださる」（七二節）という言葉です。

ザカリアはいま、イスラエルの神、主を賛美します。主はイスラエルのために救い主を起こそうとしているからです。預言者たちが語ってきた通り「ダビデの家」から出るのです。いまがその時（カイロス）です。そのこと全体は神の「憐れみ」によることです。神の憐れみは、主なる神がイスラエルと結んだ交わり、すなわち、契約を忘れない、それに忠実であることから来ています。この神の憐れみの広がりが、イエスの言葉と行動において示された、悲しむ人、貧しい人、病む人への深い同情と助けとなって示された、それについては今日触れることはできません。イエスの宣教を福音書でさらに学ぶ中明らかになることです。

イスラエルを憐れむために、神はイスラエルを、その民を「訪れ」なければなりませんでした。聖書の神は遠くから人を見下ろして、ロープを投げたり、助け棒を差し出したりするだけの神ではないのです。訪れる神です。憐れに思って走り寄ってくる神です（一五・二〇）。「訪れる」という言葉はイエスが病人を訪ねるとき使われる言葉です。神は私どもを訪れてくださいます。憐れみ、助けてくださいます。希望をもって新しい年へと歩み出して行きましょう。

（二〇二〇・一二・二七）